

PAM通信 コラム

2010年8月発行

<第41回> 何処までが仕事？

ベッドから車いすへの移乗、食べ物を口に運ぶ、着替え、入浴、など、これらは典型的な介助の仕事でしょう。在宅の介助では掃除や洗濯などの家事も仕事に含まれてくるといいます。そして、外出の付き添いもよくある介助の仕事の1つです。では、庭の草むしりはどうでしょう？利用者の家族の服の洗濯は？犬の散歩は？話し相手は？アダルトビデオを借りに行くお使いは？デートの相手は？SEXの相手は？

「(障害が原因で)できないことには社会的なサポート(介助など)がなされるべき」が、介助派遣の理念であれば、“できないこと(障害が原因でデートやSEXの相手が見つからないと主張する人もいます)”の全てが介助の仕事と言って良いはずですが、しかし、介助でSEXの相手をする人はほとんどいないと思うし、介助でデートの相手をするに抵抗感がある人も少なくないと思います。何処までが(何が)介助の仕事かを判断することは意外に難しいことだと思います。

極端な話しは避けて、身近な例から考えてみたいと思います。例えば、介助者が付き添って外食に行くとき、介助者の食費は誰が払うべきでしょう？

- (1) 工作中だから雇用者である利用者が全て払う。
- (2) 介助者が食事を取る行為は仕事ではないので介助者が全て払う。
- (3) 状況に合わせて払う割合を決める。

あなたはどのように(どうされて)いますか？

利用者は雇用者の立場ですが、介助者の食費を負担する財源があるわけではないので、外食のたびに介助者の食費をも払うことは経済的に大きな負担です。また、介助者も全額払ってもらった食事では食べたいものが選びにくくなります。しかし、介助者が外食に付き添って食べた食費を自分で払うと、出費を伴う仕事となり、介助者の収入を下げることになってしまいます。妥協案として、状況に合わせて払う割合を決める選択が良いようにも思えますが、弁当を持参しても(あるいは、食べないことを選択しても)食費を使いたくない介助者が存在して良い筈なので、割合という考え方自体が適さないかもしれません。とは言え、利用者が介助者の都合で食べるものを決めることは、前述の介助派遣の理念に照らし合わせて本末転倒です。また、介助者の食費の問題で外食を避ける生活は豊かであるとは思えません。

外食のときの食費負担は誰がどのくらい払うべきなのか？何処までが介助の仕事なのか？などの問いに正しい答えはない(時代、地域によっても違いがあります)のかも知れません。しかし、介助者からは“利用者の〇〇さんは外食が多く、付き添って出費する食費に困る”、“自分ならしない～までさせられる”。利用者からは“介助者の〇〇さんは外食を避けたがり使えない”、“～を仕事としてきちんと行わない”などの声が聞こえてきます。これらの問題に正解はないとしても、利用者との双方の状況を考慮したルールを作っておく必要があるのかも知れません。あなたは自分の立場からどのようなルールが良いと思いますか？(T)



PAM 194-0013 町田市原町田 4-18-6-102 Mail : pam@pa-machida.co.jp 緊急時:090-1406-9367

